

〈病気の誕生、あるいは病人の消滅？ 精神医学と写真

The Birth of the "Disease", or the Disappearance of the "Patient"? Psychiatry and the Photography

橋本一徑

Kazumichi Hashimoto

「彼の靴は擦り切れていない」

一八八九年二月二日、サルペトリエール病院での恒例の火曜講義で、講師のシャルコー (Jean-Martin Charcot, 一八二一—一八九三) は、いつものように自らの患者のひとりをお教室に招き入れる。「てんかん性徘徊自動症」を発症した三七歳のこの男性は、数時間から時には数日に渡って意識を失い、身に覚えのない場所でわれに返るといふ経験を繰り返してきたのだが、そうした症状の詳しい解説に立ち入る前に、まずシャルコーが着目するのは、この患者の見た目である。

「ご覧いただければおわかりのように、彼の表情は非常に

落ち着いていて、目立った特徴はひとつとしてなく、言うてみれば無表情ですが、それが知性を物語ることにもなっています」¹¹⁾

前年からすでに何度か教室に招かれ、火曜講義の常連となっていたこの男性患者は¹²⁾、てんかんと関連性を見て取ったシャルコーの処方した薬の服用により、小康状態を保っていたものの、投薬を中断した矢先に、これまでとは規模も期間も比較にならないほどの発作に見舞われることになる。講義に先立つこと二カ月前の一月八日、宅配の仕事でいつものようにパリ市内を早朝から駆け巡っていた彼は、夜七時過ぎにマザグラン通りで客から代金を受け取ったのを最後に、御者ひとりを馬車に残して消息を絶つ。彼がわれ

に返ったのは八日後、大西洋岸の町ブレストであったが、シャルコーにとつての関心事は、パリからおよそ六〇〇キロ離れたこの港町までの道のりを患者がどのように踏破したのかといったことよりも、まずはやはり彼の身なりである。

シャルコー「汚れていましたか？ 靴は擦り切れていましたか？」

患者「いいえ、先生、着ている物はきれいで、靴も同様でした。他の発作の時には靴が擦り切れていたこともありませんでしたが……」

シャルコー「この点に注目してください。彼の服はきれいで、靴も擦り切れていない。「……」彼が病人や精神異常者であると思われような行動をとったり、態度や容貌にそれを示したりすることは、絶対になかったはずです」¹³⁾

見知らぬ町で途方に暮れたこの患者は、警察に庇護を求め、所持していた金銭から盗みを疑われ、厳しい

取り調べを受けた挙句、理解ある雇い主がパリから救いの手を差し伸べるまで、六日間を当地の拘留所で過ごすことになる。しかし彼が携行していたシャルコーによる診断書に、警官が目もくれなかったとしても、この警官の不見識を問うわけにはいきまい。一九世紀、放浪とはフランス刑法典に明記された紛れもない犯罪行為であり¹⁴⁾、特に一九世紀末にかけては、増え続ける検挙者数が社会問題と化していた。全逮捕者数の内訳においても放浪者の数は突出しており、マキシム・デュカン (Maxime Du Camp, 一八二一—一八九四) によれば、一八六八年パリの全検挙者数三万五七五二人のうち、放浪者は一万四五五〇人を占めたという¹⁵⁾。放浪者が恐れられたのは、何よりも彼らが凶悪犯罪の温床と考えられていたからである。パリ警視庁治安課の元所長ギユスター・ヴァメセ (Guillaume Mace, 一八三五一—一九〇四) は、一八八七年刊行の回想録のなかで、放浪者が「市民とその財産の安全に対する恒常的な脅威」であり、「原則として、すべての放浪者には犯罪者となる素地があり、また遅かれ早かれそうなるのだ」と断言する¹⁶⁾。